

Title	書評：有末賢著『生活史宣言』（慶應義塾大学出版会、2012年）を読む： ライフ・ドキュメントの主観性という切り口をめぐって
Sub Title	
Author	水野, 節夫(Mizuno, Setsuo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.139- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評：有末賢著『生活史宣言』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：有末賢著『生活史宣言』（慶應義塾大学出版会、2012年）を読む

—ライフ・ドキュメントの主観性という切り口をめぐって—

水野 節夫

【1】

有末賢氏は、1970年代後半以降、氏自身が言うところの《生活史研究の再興期》(p.12)の潮流の一翼を担う中心的な研究活動として立ち上げられ現在にまで続く生活史研究会の第1期事務局長としての重責を果たしながら、生活史研究の分野の、とりわけ社会的・理論的含意や整理・展開などを中心とした著作群で知られる人物である。その彼によって今回これまでの研究成果を一書にまとめた本が公刊された。『生活史宣言』がそれである。巻末の「初出一覧」によれば、本書第I部の「第1章 生活史研究の視角」が発表されたのが1983年ということだから、本書は30年以上にもわたって根気強く書き継がれてきた労作と言っていいものである。

本書は、「序章 生活史宣言の意図」、「第I部 現代社会学と生活史研究」、「第II部 生活史の意味論」、「第III部 生活史の応用と解釈」、「結章 生と死のライフヒストリー」という構成からなっていて、本書の内容についてすぐれた全体的見通しを与えている「序章」での著者自身の紹介を使わせてもらえば、「第I部では、現代社会学にとっての生活研究や生活構造論、あるいは社会学理論や再帰性の社会学にとっての生活史研究の意味 [が主題的に取り上げられ] …第II部では、生活史研究を意味論…の観点から考察する [ことがなされている]。…そして、第III部においては、生活史の方法および成果として活用してきた、具体的な調査研究 [が] 展開 [されている]。…そして結章では、生と死のライフヒストリー [が] 〈生〉のライフヒストリー、〈死〉のライフヒストリー、それぞれについて検討 [されている]」(p.32)ということになる。本書のいくつかの、とりわけ概念的議論がなされている章では、読者の側に該当分野、関連分野についての理論的な蓄積や背景情報がないと錯綜した議論についていくのが難しい箇所もあるが、しかし、忍耐強く読み進めていけば、読者は、生活史研究がどういった理論的問題群と向き合いながらその歩みを進めてきたか、という点について非常に多くの知見を得ることができるはずである。

【2】

本書の成果として挙げておきたいのは、次の3点である。これらはいずれも‘生活史’現象に対してどういう観点から切り込んでいくべきかという点に関わりのあるものである。

第1の成果は、「個性と時代性」もしくは「個性と時代状況」を両睨みするという視座を提起したことである。著者は、「序章」で‘生活史宣言’という本書のタイトルに込めた意図について

水野節夫「書評：有末賢著『生活史宣言』を読む—ライフ・ドキュメントの主観性という切り口をめぐって—」

『三田社会学』第18号（2013年7月）139-145頁

明示的に触れた個所の末尾で小括的に《二一世紀の現代社会において、個性ある人間像が要求されているが、その「個性」と「時代状況」は、生活史を媒介として結び付けられる》(p.3)と述べている。この<「個性」と「時代状況」を媒介するものとしての生活史>という発想＝位置づけは大変豊かな可能性を秘めたものと評者は判断している。この関連で言えば、<どういった研究成果を出していけば、より具体的にこの視座を生かすことができることになるのか>という問題提起に答えていくことは、なかなかの難題なのだが——事実、このすぐれた視座を提起した著者自身、本書の中でこの視座に従って本格的に生活史研究を展開するというところまでいけているわけではない——、生活史研究に関心を抱く研究者たちが様々な形で挑戦していくに値するものである。

第2は、生活史研究の中に「口述とオーラリティ」論の一環として、「語られないこと」や「語り得ないこと」の存在に気づくことの大切さの発想を明示的に組み込んできている点である。これは著者の生活史宣言の主張の一つなのだが、彼は《「語り得ないこと」「生と死」「死者たち」といった「語り」だけからは解釈、分析が無理であるような状況を考える必要がある》(p.3)と述べている。とりわけ、「結章 生と死のライフヒストリー」における議論はまさに「圧巻！」と評価できるもので、この章は著者でないと書けなかったものではないだろうか。

第3の成果は、‘ライフ・ドキュメント的主観性’論が提起されていることである。次の【3】においては、若干踏み込んだ形でこの点に関する著者の議論の仕方について批判的なコメントを挟むことになるが、ここで強調しておきたいのは、この<ライフヒストリーのライフ・ドキュメント的側面>に焦点化した議論という切り口自体が、生活史研究の解釈・分析の際の着目点として多くの研究者たちに共有されて然るべき大変すぐれたものであるという点である。

【3】

ここでは著者における‘ライフ・ドキュメント的主観性’論の議論の仕方がどういう特徴を持っているか、という点に留意しながら、彼の議論を跡づけると共に、それらの議論がどういった点でどれだけ成功しているのか、あるいはいないのかをあぶり出すという形で評者なりの評価的な読みを提示してみることにしたい。

まず初めに、なぜ著者がライフ・ドキュメント的主観性に着目するのか、という点を見ておくことにしよう。彼は「第十章 個人生活史の解釈」の冒頭で生活史研究が広範かつ多様な展開を見せている点に触れながら、そうした研究動向のありうるマイナス面として、生活史研究においては、《「一体、何が中心的問題であるのか」という点》(p.283)が曖昧にされてしまいがちな点を指摘する。そして、この中心的問題をはっきりさせておくことの必要性を力説し、この課題に対する著者自身の回答の一つとして、ここで紹介・検討を加えるライフ・ドキュメント的主観性論を出してくるのである。

彼は《個人のライフヒストリーをその個人の主観的世界に可能な限り接近して抽出していく作業》(p.286)に焦点を当て、その際、まずはライフ・ストーリー的側面とライフ・ドキュメ

ント的側面の双方が重要であることを確認する。ライフ・ストーリー的側面というのは、‘人生の物語’的側面（《何十年か、場合によっては半世紀から一世紀の時間を経由して再現される生活史》(p.287)）である。他方、ライフ・ドキュメント的側面とは、‘生活／人生の記録’的側面（《個人個人が日々生活している時間軸上で絶えず起こっている「生の反省」と「生の記録」という面》(p.287)）のことである。その上で、ライフ・ストーリー的側面についてはすでに桜井厚氏がその成果を出しているのので、著者としては、ライフ・ドキュメント的側面の主題的検討を行なうことを宣言する。この後者の側面は、生活史研究の中心的問題を考える上では重要なはずにもかかわらず、未だ主題的にスポットを当てられていないからである。

それでは、ライフ・ストーリー的側面との対比におけるライフ・ドキュメント的側面の特徴とは何か。ここで著者は、次の3点に着目する（彼が着目しているのは4つなのだが、ライフ・ストーリー的側面との対比では3つである）。

第1は、《主観的リアリティの再構成の仕方》(p.288)の違いである。ライフ・ストーリー的主観性においては、これまで生きてきた人生を言わばトータルに物語ろうとするところにその特徴があるわけだから、いきおい、再構成の基軸は過去において獲得した「意味体系」ということになる（《ライフ・ストーリー的主観性から再構成される時は、過去において獲得した「意味体系」から秩序づけられる》(p.288)）。他方、ライフ・ドキュメント的主観性の場合には、現在この状況の中で生活／人生をどう生きているのか、という点に力点が置かれている関係で、《過去よりはむしろ現在と将来の生活設計にかかわる事柄から再構成される傾向がある》(p.288)。言い換えると、《今、一番何が言いたいのか、何を感じているかということ》(p.288)がクローズアップされることになる。

第2の着目点は、《リアリティの再構成に際しての「正当化の装置」》(p.288)の作動の有無もしくは度合の違いである。ここで「正当化の装置」という言い方で念頭に置かれているのは《「生活史の諸経験を秩序づけ、意味づける『意味体系』を獲得した経験」》(p.288)の存在のことで、ライフ・ストーリー的主観性においてはそれらが特権化されるのに対して、《この「正当化の装置」は必ずしもライフ・ドキュメント的主観性には貫徹されていない》(p.289)。その結果、ライフ・ドキュメント的主観性においては《正当化しえない葛藤や矛盾が滲み出ている場合もあ》(p.289)って、著者の興味関心は、まさにそうした側面にこそ向けられている。

第3の着目点は、《「重要な他者」にかかわる問題》(p.289)である。ライフ・ストーリー的主観性においては、その人物の生活史全体との関連で浮上してくる「重要な他者」たちが選び出されてくるのに対して、ライフ・ドキュメント的主観性にとっては、そうした生活史全体の中での位置づけは未確定のまま、あくまで当事者が生きている《現時点での「自己と他者」との抜き差しならない関係性》(p.290)こそが注目されるのである。

次は大変わかりやすく説得力のある議論提示になっていると思われる点について2つほど触れておく。

1つは、“逃亡者意識”論と言っているもので、「第十章 個人生活史の解釈」の「第三節 自

己と他者の関係性——反省としての『日記』(pp.291-298)で行なわれている。著者がそこでライフ・ドキュメント的資料として具体的に取り上げているテキストは稲垣尚友『悲しきトカラ』(1980)なのだが、そのテキストの精査・検討作業を踏まえて彼は、「島から逃げてきた」という意識(p.292)、「“逃亡者”意識」(p.293)を人間・稲垣氏の特徴として掬いあげてくるということをやっている。(評者自身は原テキスト自体にあたっているわけではないが)この掬い上げの作業のために例示的に提示されてくる関連データ群との兼ね合いで言えば、この意識の析出は非常に説得力のあるものになっているように思う。

もう1つは、稲垣氏の生活史の結节点的クロノロジーの提示がなされている個所での話の進め方で、こちらは、「第十一章 彷徨するアイデンティティ」の「第三節 稲垣尚友氏の生活史とライフ・ドキュメント」(pp.313-321)でなされている。彼はそこで、【表 11-1 稲垣尚友氏の略年譜】(pp.315-316)を作成すると共に、〈1 出発点としての二二歳の旅立ち〉〈2 南島への憧れと「地名」採集〉〈3 島への定着と離脱〉〈4 竹籠作りから竹大工師へ〉〈5 島からの逃亡者意識と島への回帰〉という小見出しを設けながら、稲垣氏の生活史の流れ＝クロノロジーの簡潔な紹介を行なっている。

最後は評者なりに引っかかっている議論の仕方について、2点に絞って見解を述べていくことにしたい。

先ず第1は、ライフ・ドキュメントの主観性のリアリティ構成の図式化に用いられている整理軸絡みの議論の仕方である。

「第十章 個人生活史の解釈」の「第四節 記録することと論理的認識」には図 10-1として「ライフ・ドキュメントのリアリティ構成」の小括図(p.299)が載せられている。《生活史の次元分類》を提示するという名目で、縦軸に《生活史の諸相》として【平島生活記録；個人史；精神史】の3つを、それから横軸に《生活世界のリアリティの層》として【身体性；象徴性；日常生活；論理的認識】の4つを設定し、その二つの軸をクロスさせる形で12のボックスを準備し、『悲しきトカラ』の日記や手記から「キーワード」になると著者が判断した関連情報群を入れ込んだものである。

これは著者の対象把握の仕方の主要な特徴の一つと言ってもいいものではないかと思うが、彼は本書のいたるところで様々な整理軸を提示している。生活史研究に関連するものに限定しただけでも、例えば、【図 1-1 生活史研究の四つの視角】(p.50)、【図 2-1 生活把握の類型】(p.71)、【図 2-2 生活の歴史的研究の布置連関】(p.74)、【表 4-2 ライフ・ストーリーの主観性とライフ・ドキュメント的主観性】(p.133)、【表 4-5 質的データの分類と性格】(p.134)、【図 5-1 生活史の布置連関】(p.155)、【図 5-2 生活史資料と分析の布置連関】(p.158)などを挙げることができる。ここには、研究対象とする諸現象のヴァリエーションを概念的に把握し、それらの諸現象に関して理論的見通しを与える包括的な「認知地図」を提示しようという強い意志があるのではないかと、いう気がする。この意志は、ライフ・ドキュメント的主観性論についても見られるもので、それが先にその概要を紹介した【図 10-1 ライフ・ドキュメ

ントのリアリティ構成】になるわけだ。

そこでのコメントは生活史の諸相に着目しながらなされているものだが、少なくとも平島生活記録の欄や個人史セクションでのコメントの仕方を読む限りでは、どのボックスにどのような内容のものを‘マッピング’的に入れ込んだか、という点について概略的説明が言わば‘総花的’になされている印象が強く、(‘整理軸’‘分析軸’といったものは、その軸を設定したことによる‘議論展開力’を見せてもらえない限りはあまり納得しない、という、評者の側のバイアスを所与にして言えば) 整理軸を設定したことの効用がイマイチ伝わってこないように思われる点は惜しまれる。そうした中、精神史の軸でなされている短いコメント群 (p.301) だけは、《「専業・分業のない生活＝原初」と…「専業・分業の中に生きる生活＝近代」との対峙・対立の構図》や《「島づくり」という“建前”を前面に押し出す認識と“ありのまま”を人間的と考える認識とが…対立の構図を見せている》などの把握に見られるように、稲垣氏が抱え込んでいる葛藤や対立に体现されている精神的緊張の構図に関して興味深い議論展開への予感を感じさせてくれるものである。

それでは、もう一つ引っかかっている個所の検討に移ろう。それは、「第十一章」の「第四節 探し求めるアイデンティティ」で著者が行なっているアイデンティティ論的観点からの稲垣氏の事例の位置づけ (pp.321-328) の仕方をめぐるものである。彼はそこで、アイデンティティの問題を個人的パーソナリティ論に収斂させていくやり方に異を唱えながら、現代的なライフヒストリー研究の課題として《アイデンティティの軌跡を…社会的・文化的脈絡の中で再解釈していく》(p.321) ことの重要性を指摘し、《稲垣氏のライフヒストリーから「彷徨するアイデンティティ」の軌跡を追》(p.321) う、ということをやっている。

彼のそこでの眼差しは二重のものである。一つは稲垣氏のライフヒストリーに即する眼差しであり、もう一つは《稲垣氏ではない社会的人間の場合にも〔見られるはずの〕、アイデンティティを探し求めるという共通の課題》(p.322) の解明への眼差しである。

この試みを著者は、稲垣氏自身が頻繁に用いている鍵となる言葉 (=A) と著者自身の特徴的把握を示す言い回し (=B) を、<BとしてのA>という具合に組み合わせる形で行なっている。具体的には、「メタファーとしての『旅』」、「失われたものとしての『原初』」、「拠点としての『島』」、「存在証明としての『手』」というまとめ方がそれで、各々の着目点に1つのセクションを割り当てる形になっている。

この議論はどこまで成功していると言えるのだろうか。

評者としては、著者が掬いあげてくるキーワードや着目点のそれなりの鋭さに感心しているのだが、それと同時に、著者が提示してくる定式化や把握の仕方については、いくつかの個所で微妙な違和感を持っている。以下では、次の3点に絞って評者として引っかかっているところに触れることにする。

第1点は、<メタファーとしての「旅」論でなされている、《稲垣氏は…隠喩(メタファー)として〔の〕旅に固執している》(p.323) という著者の主張に関連するものだ。読み手として

の評者の違和感は、この主張と彼がそこで例示的に出しているテキスト群との間の微妙な齟齬に由来している。それらのテキスト群を読む限りでは、‘隠喩として’という特徴づけが稲垣氏の旅への思い入れの把握の仕方としての的を射たものになっているか、よくわからないのである。確かに、著者が書いているように、稲垣氏は「あてどのない旅」をよくしている。とりわけ《好き勝手な方角に、好きな日程で動くタビ》(p.322)を好んでいると言っているようだ。問題は、なぜそうしたタイプの旅が好きなのか、である。どうやらそれは、稲垣氏が《好き勝手せずしては、自由な発想は生まれてきっこない》(p.323)という実感に裏打ちされた強烈な価値観を持っているからのようで、この点こそが彼にとっての旅の意味と見ていいように思う。これを総括する場合、はたして〈メタファーとしての「旅」〉という定式化が適合的なのか、というのが、ここで評者が引っかかっている疑問点である。

2 つ目は、〈失われたものとしての「原初」〉論の中で(稲垣氏の生き方に内省を迫る上で重要な役割を果たした)ヒッピー集団の生き方について稲垣氏自身が吐露している気持ちの解釈をしているくだりである。

著者はそこで、稲垣氏その人の特徴を浮き彫りにする上では重要と思われる、ヒッピー集団絡みでの内的対話を引用している。そのくだりを読むと、状況的に重要な比較他者としてヒッピー集団の人々が稲垣氏に影響を与えていることは確かなのだが、評者の見るところ、この引用の中で一番重要なのは一番最後の一文、つまり、《…しかし、私と決定的に違うのは、彼らは集団であり、私はあくまでひとりである、ということだった。》(p.324)である。この一文を含めた、それなりに長い文章を引用した後、著者は、《ここに正直に語られている稲垣氏の気持ちは、「原初」とか「人間の原型」という観念を島にだけ向けてはいなかった》(p.324)と述べているのだが、はたして、そういう解釈になるのか、という疑問を抱かざるをえない。今手短に紹介したヒッピー集団に対する稲垣氏の揺れ動く見解を表明したくだりに触れた文章が、「原初」や「人間の原型」という観念に関連した主題として位置づくことになる、という繋げ方がよくわからないからである。

3 つ目は、〈5 存在証明としての「手」〉(pp.325-327)というセクションで自意識の問題絡みで紹介されている内容と〈存在証明としての「手」〉という定式化との対応関係の微妙なズレである。

著者はそこで稲垣氏の《青春期の揺れるアイデンティティを統合している一本の筋として象徴的な意味での「手」に注目》(p.325)している。この指摘自体は、それなりに説得力があるものである。しかし、この指摘とそれに続けてこのセクションの大部分を使って稲垣氏に見られる自意識の特徴に触れている個所との関連がよくわからないのだ。

稲垣氏の自意識に関しては、《どこの地方に行ってもコーヒーを飲む。コーヒーが好きだからではなく、喫茶店に入りコーヒーをすする自分を遠くから眺めているのが好きなのである。》(p.327)といったくだりに見られるように、それ自体としては大変興味深いミニ・エピソードが2つほど紹介されていて、これらのエピソードが稲垣氏という人物の特徴的な一面をあぶり

出すものであること——つまりは、存在証明の問題と切り結ぶものであることまで——は、著者が指摘する通りであると思うのだが、これが先に紹介したような意味での〈存在証明としての「手」〉とどう関連しているのか、と考え出すと、わからなくなってくるのである。

【4】

‘ライフ・ドキュメント的主観性’論はなぜ魅力的なのか。最後にこの点について簡単に触れておこう。

ぼくたちが現に生きている人生には、‘一瞬にしてその意味が思ってもいなかったような変貌を遂げてしまう’可能性を排除できないという特性が具わっている。生きている限り、原理的には‘一瞬先はわからない’と言わざるをえないのである。そしてライフ・ドキュメントは、まさにこの人生の未確定性、未完結性を反映・体現した素材群なのであり、(本書における著者の〈彷徨するアイデンティティ〉論にも見られるように、研究者の側にその気がありさえすれば)この未確定、未完結の諸相を様々な形で浮き彫りにすることができる切り口をライフ・ドキュメント的主観性論が提供してくれているという点にこそ、その魅力があるのではないだろうか。こうした議論脈絡では、当事者の生活史全体を言わば統括する「意味体系」の存在が特権的位置を占めているライフ・ストーリー的主観性と当事者が現に生きているその時点その状況において「意味のある記録」が重視されるライフ・ドキュメント的主観性との間のせめぎ合い、人生の意味づけをめぐるの両者のせめぎ合いに焦点化する形で議論をすることは興味深い可能性を秘めているように思う。

(みずの せつお 法政大学社会学部)